

# 鯨 研 通 信

第 367 号

1987年 3月

財団法人 鯨類研究所 〒136 東京都江東区大島3丁目32番11号

電話 03 (683) 3621 (代表)



## 淡水イルカ国際研究集会

### —ヨウスコウカワイルカを求めての旅—

筑波大学・医療技術短期大学部 神谷敏郎

中国では初めての鯨類に関する国際研究集会、「淡水豚類生物学と物保護国際学術討論会」が、昨86年10月27日から11月6日にかけて開催された。会議の使用指定語である英語では、Workshop on the Biology and Conservation of the Platanistoid Dolphins (WBCPD) である。この国際研究集会は、中国科学院、中国環境保全局と、スイスのジュネーブに本部をおいて活動している、国際自然保護連合 (International Union for the Conservation of Nature = IUCN) の三機関が共催して開かれた。参加者は中国から30名、海外から7カ国19名の科学者が集い、基調報告4題と、38題の研究発表のほか、科学的勧告を含めた数題の協議提案がなされた。会議の公式報告書が今年の夏に刊行されることになっていて、目下編集業務が進められている。日本からは粕谷俊雄博士 (水産庁・遠洋水産研究所) と私が参加した。研究討議の課題を淡水イルカ\*に限定した国際研究集会も、世界的にみて初めての企画であり、大変有意義な集いであった。討議内容については、後日 Proceeding を読んでいただくこととし、ここでは個人的な印象記で恐縮であるが、Workshop の一端を紹介させていただく。

#### 議事内容と出席者

鯨学界において初のWBCPDが中国で開催された

ことから窺えるように、中国関係者の熱意は大変なものであった。実際の運営は、中国科学院水生生物研究所 (武漢市) および南京師範大学 (南京市) のスタッフが当たられ、心のこもった温かい配慮をいただき、参加者は感銘をうけた。

会議内容は次の3点を柱として進められた。1) はじめの4日間は武漢での研究集会、2) そのあと長江 (揚子江) の現況視察とヨウスコウカワイルカ (*Lipotes vexillifer*) の目視観察、3) 湖北省石首市および安徽省銅陵市とに建設が計画されている *Lipotes* の保護センターの視察であった。

参加者の顔ぶれを見てみよう。中国からは、現在 *Lipotes* の研究の中軸となって研究活動を精力的に展開している二大研究グループ、すなわち、中国科学院水生生物研究所 (刘建康所長、刘仁俊教授、陳佩薰副教授他) と南京師範大学 (掃鴻学長、周開珏生物学部長、李悦民副教授他) の研究者の方々をはじめとして、他大学、研究機関から多くの方が出席された。一方、外国からの参加者はアメリカの9名を筆頭に、自国に淡水イルカの分布域をもつブラジル (3名)、アルゼンチン (1名)、ネパール (1名)、インド (1名)、パキスタン (2名) の各国および日本 (2名) の計7カ国19名の研究者であった。これら外国人参加者は次の方々である。

\*最近まで、淡水イルカ科は1科4種とされてきていたが、インダス河流域生息種を別種として分離独立させ、5種とする見解がだされ論議されてきていた。1986年に大英博物館自然史部門より刊行された A world list of Mammalian species (Corbet, G.B., J.E. Hill 編, 第2版) においても5種を採用した。すなわち、

ヨウスコウカワイルカ (*Lipotes vexillifer*)  
ガンジスカワイルカ (*Platanista gangetica*)  
インダスカワイルカ (*Platanista minor*)  
アマゾンカワイルカ (*Inia geoffrensis*)  
ラブラタカワイルカ (*Pontoporia blainvillei*)  
である。アジアに3種、南米に2種が分布する。

ARGENTINA

Dr. Crespo, E. A. (Universidad de Buenos Aires)

BRAZIL

Dr. Best, R. C. (Instituto Nacional de Pesquisas da Amazonia)  
 Dr. da Silva, V. ( " " )  
 Dr. Pinedo, M. C. (Fundacao Universidade do Rio Grande)

INDIA

Dr. Lal Mohan, R. S. (Research Centre of Central Marine Fisheries Research Institute)

JAPAN

Dr. Kamiya, T. (University of Tsukuba)  
 Dr. Kasuya, T. (Far Seas Fisheries Research Laboratory)

NEPAL

Dr. Shrestha, T. K. (Tribhuvan University)

PAKISTAN

Dr. Khan, K. M. (Wildlife Management Board)  
 Dr. Niazi, M. S. (Zoological Survey Department)

U.S.A.

Dr. Atkins, N. (Whale Protection Fund Center for Environmental Education)  
 Dr. Brill, R. L. (Chicago Zoological Soc.)

Dr. Brownell, Jr. R. L. (U. S. Fish and Wildlife Service)

Dr. Chu, K. (Ocean Research and Education Society, Inc.)

Dr. Norris, K. S. (University of California)

Dr. Perrin, W. F. (I. U. C. N.)

Dr. Ralls, K. (National Zoological Park, Smithsonian Institution)

Dr. Ridgway, S. H. (Naval Ocean System Center)

Dr. Schreib, S. (The Pittsburgh Zoo)

*Lipotes* の見学

初日の10月27日午前は、会議に先立って、水生生物研究所において飼育されている *Lipotes* の見学が行われた。飼育場は研究所から車で20分程離れた場所にあり、現在2頭が研究用に飼育されている。1頭は6年前の80年に保護された雄である（現体長185cm）。このイルカが保護された時は、後頸部に直径4cm、深さが8cmもの大きな刺傷を負っていて、瀕死の状態に担ぎ込まれてきた。その後、研究所あげての手当によって傷も癒え、淇淇 (QiQi) と名付けられ、今では *Lipotes* 保護運動のシンボリック的存在となっている。研究所から発表されてきている *Lipotes* に関する生理学的データや行動分析資料等は、全て淇淇君から得られたものである。他の1頭は昨86年に研究調査のた

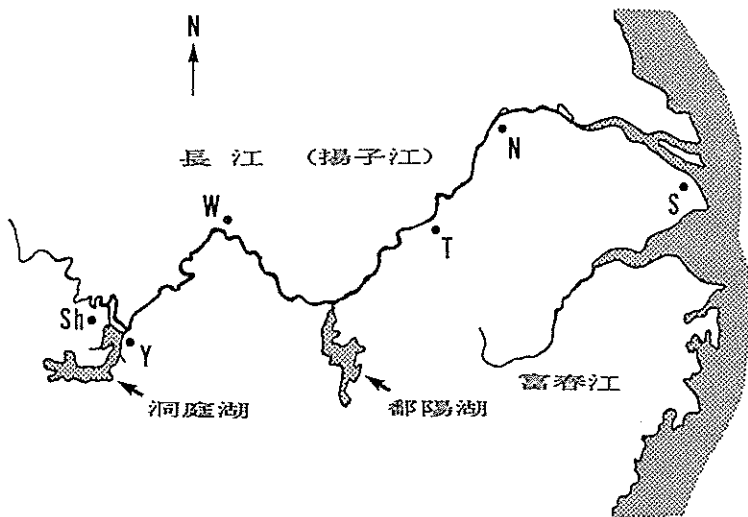


図1 長江 (揚子江) の中・下流域で、ヨウスコウカワイルカと関係の深い都市と湖。  
 N : 南京市 S : 上海市 Sh : 石首市 T : 銅陵市 W : 武漢市 Y : 岳陽市

め特別保護された若い雌である。

飼育槽は直径15m、高さ6mもある大きな円筒状のプールで、水深は2.5mに保たれていた。見学者はかなり高い位置からイルカを見下ろすことになる。*Lipotes* は一見して *Platanista* とよく似ている。大きさ、体形、小さな眼、吻の前半部が上むきに反っている点や手羽の外形などである。また、体色も *Lipotes* は腹部が白っぽいものの、全体は青灰色で、*Platanista* とよく似ている。背びれだけは *Lipotes* の方が大きい。学名の *vezillifer* は「旗を背負った」という意味で、特徴の一つである三角形をした大きな背びれからつけられている。

中国で唯一、ということでは世界中でこの2頭のみが、確実に目視できる *Lipotes* とあって、見学者一同、しばし魅せられ1時間ほど観察や写真撮影を行う。私は81年の春に水生生物研究所を訪問し、淇淇に会っているので、この5年間のたくましい成長ぶりを見ることができ感動する。2頭は仲よく連れ合っただけで行動していた。体の大きさの違いから親仔のようにみえて微笑ましい。研究所の人から「この可愛らしいイルカが、本流ではしばしば船舶のスクリューに触れて、無惨な姿で死んでいる。どうもスクリューの水の中音に引かれて近づいていってしまい、命を落としてしまうようで、この行動分析の研究を進めている」との説明をうけた。

## 学術討論会

研究発表と討議はベリン博士が議長を務められ、同博士の的確な司会のもとで進められた。淡水イルカの生息域を自国にもつ国々の科学者による、生息環境の現状と資源量の推移などについての基調報告を土台にして討議が進められた。それぞれの種類に共通した第一の問題点は、河川沿岸の経済発展にともなう水質の汚濁と、貯水や発電のための大規模なダム建設による生息環境の生態系の変化である。さらに、*Lipotes* については、長江の船舶輸送機関の飛躍的な発展にともなう被害が大きな問題となっているとの報告があった。経済発展と環境保全との競合に各国の科学者は腐心している。

ダム建設と淡水イルカの生息環境保全との対応についての討議は、時間の関係から夕食後に改めてホテルの一室に関係者が集まって協議された。ブラジルのベスト博士が座長となって夜遅くまで話し合いがもたれた。座長が討議要旨をまとめ、参会者の合意のサインを求め、勧告案として議長に提出された。

南米の *Inia* と *Pontoporia* については、緊急に取

上げる問題はなく、今後の推移、特に環境の変化を注意深く見守っていくことでよいとの合意がみられた。これとは対照的にアジアの *Lipotes* と *Platanista* については、厳重な環境保全への対策を考えていくべきである、との統一見解となった。

*Platanista* の生息頭数については、インド領内1,000頭とパキスタン領内429頭と具体的な数字をあげての現況説明があった。イルカ保護運動の普及・啓発に力を注いでいくことによって現況維持と保護は可能であるとする、楽観的見解であった。ベンガルデルタを占めるパングラディシュ（ブラマプトラ河流域）が不参加であったが後日、議長宛に現況報告があり、比較的安定した資源が確保されているとのことである。これに対して、ガンジス河の *Platanista* 生息上限域をもつネパールのシュエスター博士からは、現在建設計画が進められているダムサイドに生息流域が含まれていることから、その解決策として本流に側水路を設けて環境保全を計りたいとする詳細なプランの説明があった。

ヒマラヤ山麓のネパールに淡水イルカが生息していること自体ふしぎに思われるかもしれない。ネパールでは、インド国境に接する東西にベルト状に走る地帯は亜熱帯で、国土の半分近くを占めている。ヒマラヤから流れでた水は、この地方でいくつもの河をつくり、ガンジス河の源流をなし、ここまで *Platanista* が遡ってくる。河の流れには国境はないので、増水期と増水期とでイルカは両国間を往き来しているが、ダム建設で流れが分断されてしまうことがある。現に河川によっては、インド領にダムがつくられたため、ネパールのイルカが封じ込められてしまっているとの報告であった。

*Lipotes* の現在の生息数は中国の科学者の発表によると、200頭前後にまで激減してしまい、自然の条件下での種の保持（繁殖）すら危ぶまれる状態にあるという。中国の珍獣ジャイアントパンダよりもはるかに危険な現況におかれている。中国はパンダの保護対策について、IUCNや世界野生生物基金（WWF）からの支援をうけて、大規模な救済作戦を展開し成功をおさめた。この実績を踏まえて、今後は *Lipotes* の保護についても国際協力を求め、本格的に取り組みようとしている。今回WBCPDが中国で開催されたのも、その配慮によるものであろう。

IUCNは昨86年12月に、今回の研究集会の終りを待っていたかのように、「現在世界で最も絶滅が心配される動物」として *Lipotes* を指定し公表した。この指定は権威あるもので、Red Data Bookに掲載

され、指定動物が生息している国家は勿論、国際的にも関係者は協力してその保護にあたることになる。それだけに、指定をうけることは絶滅への崖ぶちに追い込んだことを意味する。当然、私達も *Lipotes* の保護に協力していかなくてはならない。隣国の淡水イルカの保護に、上野動物園のパンダに注いだ国民的情熱を *Lipotes* にも向けて欲しいものと願わざるを得ない。*Lipotes* は非常に shy な動物であるという。かつて太古においては、外海にも広く分布していたが、他のイルカとの生息環境維持闘争に破れ、その安住の場所を求めて河を遡り、長江の悠久の流れに身をゆだね細々と生きながらえてきたのに、今度は人間との生存競争に生息圏が脅かされてきている。

### 石首保護センター

長江中流域で *Lipotes* が最もよく発見できる場所は、湖北省の石首市から安徽省の銅陵市附近までの調査結果が発表されている。水生生物研究所では石首市の協力を得て、石首白鱘豚保護飼養センターの設置計画を進めている。学術討論会が終った翌日の10月31日から11月2日にかけて、石首保護センター設置予定地の実地視察と、石首市から洞庭湖の入口に位置する岳陽市までの長江における *Lipotes* の目視視察とが実施された。

武漢を朝、車で発って14時すぎに石首市に着く。まず保護センター予定区域への案内をうける。長江本流から、円を描くように流れている支流の一部を仕切って、自然環境に近い飼養所を設置して繁殖を計りたいという(図2参照)。支流といっても大運河で、洪水期であったが水量は豊富である。増水期にはちょっとした湖となるであろう程の流れである。魚類も豊富とのこと。私達一行を案内してくれる小船が15隻も待機していてくれて、各船に4、5名ずつ乗って本流近くの船が方向転換時に転覆してしまうという事故が発生したが、幸い怪我人はなく、調査を中断して上陸した。保護センター設置地域としては適地であるというのが皆さんの意見であった。

翌日は、武漢から回航されてきた、水生生物研究所の調査船に乗船して、石首市を朝発って洞庭湖入口に位置する岳陽市までの約120kmの間を目視視察を行なった。久しぶりの野外調査とあって各自が張り切って参加した。この間折々スナメリ(*Neophocaena phocaenoides*)を観察できたが、*Lipotes* の姿は2回のみ発見されただけであった。それも運の良い人の眼にはとまったものの、出現位置と反対側を監視していた人達

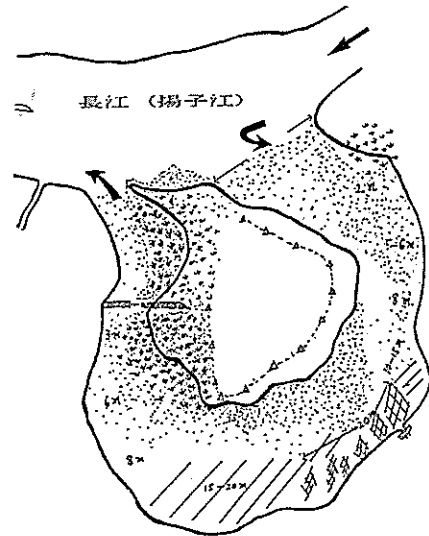


図2 湖北省、石首ヨウスコウカワイルカ保護・飼養センター設置予定地の水流。矢印は水流の方向を示す(研究集会配布資料)。

はついに見ることができなかった。長江のスナメリは日本近海種に比べて体色が濃く黒くみえる。長江種を亜種として分類することが、特に中国の科学者から提案されている。

船内では一服した時や食事など、意見交換や懇談の輪ができ話がはずんだ。私もノース教授からイルカの聴覚系について、またリッジウェイ博士からは、博士が最近まとめられたイルカの脳に関する見解について種々教示をいただくことができた。*Pontoporia* をウルグアイの人達は *Franciscana* と呼んでいるが、その由来を知りたいと思っていた。この点についてはブラジルのピネード女史より、*Pontoporia* の体色が昔の僧衣の色彩とよく似ていたことから *Franciscana* と呼ばれるようになったという話を伺え長年の疑問が解けた。

夕方、岳陽港に着く。70年前の1916年2月に洞庭湖でカモ猟をしていた米国の青年が打止めた一頭のイルカが *Lipotes* の誕生をもたらした所縁の地である。いつか洞庭湖を訪ねられたらといった願いが叶えられ、夕陽に燃ゆる湖面に魅入った。

港に隣接した新しいホテルに到着。この夜の会食が終りに近づいた頃、大きなバースディケーキが運ばれてきた。「粕谷博士の誕生日を皆さんと祝したい」と、周・ブラウネル両幹事の挨拶があり、Happy birthday my dear Kasuya! の合唱となる。楽しい

一時を送る。20時より「淡水イルカの目視観察」をテーマに意見交換の集会があった。粕谷・ブラウネル両博士が座長をつとめられ、ここでも熱心な討議が夜遅くまで続けられた。

### 安徽銅陵保護センター

岳陽から陸路武漢に戻り、11月3日朝に漢口港から上海に下る定期船に乗り、安徽省の銅陵市に向う。一昼夜の船旅で4日朝銅陵港に着く。港には副市長さんを先頭に、銅陵白鱘豚保護協会の方々が出迎えて下さる。銅陵市が *Lipotes* 保護にかける意気込みは大変なもので、南京師範大学鯨類研究室とタイアップして活発に活動している。陣頭指揮をとっておられるのが周開亜教授である。銅陵保護センター設置計画については、すでに鯨研通信 361号にて周論文を紹介しているので、参考にさせていただきたい。

11月4日午後保護センター設置予定地域の実地視察が行われた。市の中心部から車で30分程離れた所の長江にある巨大な中洲(島)が候補地で、すでに一部の工事は着手されていた。例えばイルカ飼養予備槽として、直径10m、高さ2.5mの円筒状のプールができていて、近いうちにスナメリを搬入して、試験飼育が開始されるとのことであった。現地を訪ねてみて、改めてセンター設置構想の規模の大きさと、綿密な計画に感服する。

翌5日は早朝から夕方まで、調査船に乗って銅陵流域での目視観察が行われた。保護協会の人達も大勢参加し、終日上甲板のトップに立って見張りにあたった。この日観察できたイルカは、スナメリ(2~3頭連れ)が5回と *Lipotes* の2頭連れが1回であった。この流域でも *Lipotes* との出会いはずめて難しい。一方、私達外国人の多くが、長江を上下航する船舶の数の多いことに驚かされた。船舶運行量は今後ますます増加が見込まれていて、5年後には現行の倍以上にも達するという。 *Lipotes* を本流から隔離して保護すべきであるとする見解も理解できる。

白鱘豚啤酒(ヨウスコウカワイルカビール)が銅陵市のビール工場で生産され、市販されていた。市長主催の歓迎会の席にでたビールで、「*Lipotes* 保護運動のアピールのために考えだされたもので、市の特産品として宣伝し評判になっている」とのこと。私達も白鱘豚啤酒で *Lipotes* 保護運動の発展を祈って乾杯した。ビール瓶の王冠の面には *Lipotes vexillifer* と学名が印刷されていた。王冠コレクターのベスト博士が「これは世界的に類のない珍品である」と持ち帰りをすすめてくれた。



図3 ヨウスコウカワイルカ(白鱘豚)印ビール(啤酒)のラベル(安徽省銅陵ビール工場製)。

会食後、保護協会主催でノース教授とリッジウェイ博士の講演が行なわれた。 *Lipotes* に関心をもつ人達80余名の出席があり、周教授が通訳をつとめられた。イルカの人工受精のための精液の採取方法など、具体的で興味深い話題についてきれいなカラースライドを使って説明があった。

11月6日早朝の列車で銅陵を発って南京に向かう。4時間の旅。南京師範大学を訪問、学長主催の昼食会にお招きいただき懇談。午後は鯨類研究室を見学する。これで今回の Workshop の全日程を終了する。WBCPDを一回で終わらせるのではなく、一定期間おいて第2回、3回と継続開催が話し合われた。3年後位に次の集りをブラジルのマナウスでどうかといった具体案もでた。帰国を急ぐ人達は夜の便で発つ。11月7日朝再会を願って皆さんと別れた。

### 国際研究集会を終えて

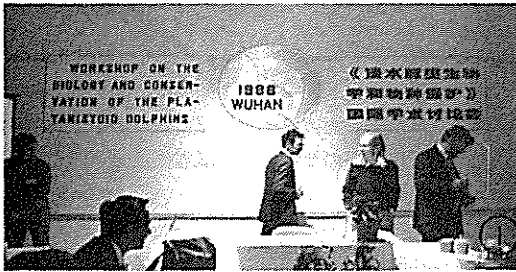
中国では十月を金秋十月と呼び、実りの秋を祝福するという。第1回WBCPDも実り多い集りであった。楽しく有意義な半月間の訪中で、多くの事を学ぶことができた。中国の科学者は情熱的で明るく、全てに積極的である。中国ではいま、関係者の間では、 *Lipotes* の救済活動を長江パンダ作戦と呼んでいる。国獣パンダに対する手厚い保護運動にあやかって、パンダ以上に絶滅の危機に瀕している稀少動物に

ついて、国の内外を問わずより多くの人々の理解を願っての命名であるという。Lipotes の保護作戦が成果をあげ、21世紀の長江下りには Lipotes の群が船に伴泳して、その雄姿を何時迄も見せてくれることを願ってやまない。

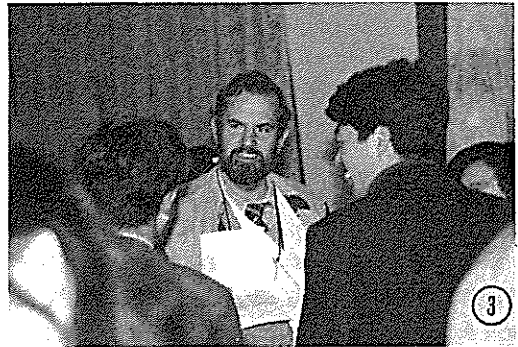
新年を迎えて程無い、1月12日にブラウネル博士より「R・ベスト博士が、中国より帰ってまもない12月17日に、イギリスのケンブリッジで病死された」という訃報を受取った。強健そのものといった体格の持主で、生涯のうちで一番活発な研究活動を展開していたであろう彼の突然の死を信じられなかった。中国には、研究分野を同じくするダ・シルバー夫人とともに出席された。中国からケンブリッジ大学へ行き、1年

間大学で研究生活を送るとのことであった。二児の父親で、全てが祝福につつまれてみえた彼の死は痛ましい。世界の水生哺乳類学界から、将来の活動が囑望されていた、若き研究者が失われた。

英国オックスフォードの出版社から刊行された The encyclopaedia of animals (1984) の訳本が、昨年夏に平凡社より『動物大百科』として出版された。その2号は鯨目を中心とした海生哺乳類が解説されている(大隅清治博士監修)。この中のカイギュウ目の項の一部をベスト博士が分担執筆され、珍しい生態写真をそえて解説してくれている。「日本でも多くの人達に読まれている」と話したら、とても喜んでくれた笑顔が忘れられない。



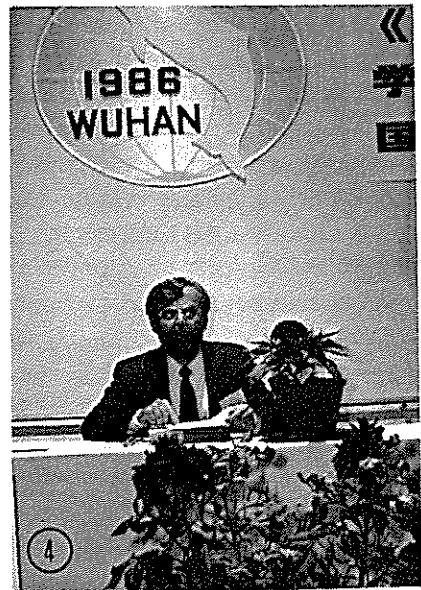
① 學術討論会場(武漢市・中国科学院水生生物研究所會議室)。



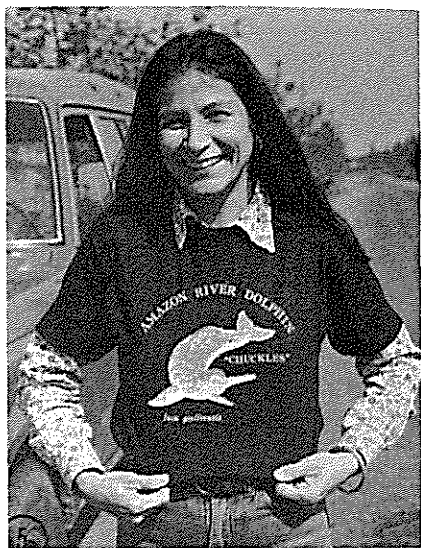
③ リッジウェイ博士(アメリカ)。武漢に到着された日の夜、ホテルの階段で足を滑らせ、左肘を強打し骨折されてしまった。左手を固定し三角布で吊っておられる。



② 會議場にて、左より劉建康博士(水生生物研究所長)、周開亞教授(南京師範大学生物學部長)、ベスト博士(ブラジル)、李悅民副教授(南京師範大學鯨類研究室主任)。



④ ベリン議長(アメリカ)。名議長と評判が高かった。



⑤ ダ・シルバ博士（ブラジル）。ピッツバーグ動物園から贈られた、アマゾンカワイルカTシャツを着用してご機嫌。



⑥ ノーリス教授ご夫妻（アメリカ）。夫人も終始討論会に出席しておられた。



⑧ 代表幹事として活躍されたブラウネル博士（アメリカ）と討論中の水生生物研究所鯨類研究グループのリーダー陳佩薫女史。



⑦ 協議中の、左からベスト、クレスポ（アルゼンチン）とアトキンス（アメリカ）の各博士。



⑨ 移動日の昼食時に懇談中の劉仁俊教授（水生生物研究所・左）とシュレスター博士（ネパール）。



⑩ 検査のために担架に乗せられて、飼育プールより運び出される“淇淇”  
(中国科学院水生生物研究所提供写真)。

### ストランディング・レコード - 4

番号	日付	種類	頭数	場所	報告者	備考
M-1	12/12/1986	ザトウクジラ*	1	富山県氷見市宇波海岸沖(定置網)	原 武史 (富山水試)	体長12m。 詳細は後日報告予定。 新聞記事も多数。
O-6	22/12/1986	ツチクジラ	1	新潟県北蒲原郡中糸町中村浜	池原 宏二 (日本海区水研)	体長9.6m。雄。 詳細は後日報告予定。

\*このストランディングについては、1986年12月13日付の北日本新聞、北陸中日新聞、読売新聞、富山新聞など多紙で取りあげられたそうです。

また、上記の原さんとは別に、このストランディングについて東京・中野の中村春江さんから北国新聞の記事をお送りいただきました。御礼申し上げます。